

巻 頭 言

情報科学研究センター所長

小 淵 洋 一

『城西情報科学研究』は、今回で第15巻になります。本研究は、第11巻から研究論文についてはレフェリー制度を導入し、新たにスタートしましたが、多くの先生方にご投稿頂き、深く感謝致しております。

さて、今回は12名の先生にご投稿いただきましたが、研究論文はありませんでした。理学部の数学、化学、物理の4名の先生による「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」(文部科学省プログラム)の実施報告は、理科離れ、数学離れが進んでいる今、その意義は非常に大きいと思います。

前巻では、マルチメディア教育に関する特集号を組み、巻頭言でもそれについて触れさせていただきました。今回は、e-Learningについて少し述べ、巻頭言とさせていただきたい。昨年6月開催された私情協の情報教育フォーラムにおいて、e-Learningがメインテーマとして取り上げられました。そのなかで、慶応義塾大学経済学部 杉山伸也教授による実演を交えた日本経済史の授業のe-Learningについての講演は、強い衝撃と自らの授業の遅れを痛感しました。その授業は、私たちが今後目指さなければならない21世紀型の授業でした。しかし、それを実現するためには、授業教材作りの時間とそれをサポートしてくれるスタッフが必要だと思いました。同教授によれば、教材作りには多くの時間とかなりのスタッフが関係しているとのことでした。また、講演の後、先生のようなe-Learningの授業を学部では何名の先生が展開していますか、と質問したところ、私しかしていないとのことでした。

本学経済学部では、今年度e-Learningについての基礎的な知識の普及とその利用可能性を探ることを目的としたFD研修会を実施しました。経済学部では、ある教授が中心となって「J-Econ」と呼ばれる、e-Learningの経済学教材が作成され、一昨年度から入学前課題として運用されています。しかし、杉山教授のようなe-Learningの授業は、現在経済学部の一般の授業ではまだ展開されていません。

情報科学研究センターでは、そのようなe-Learningの授業が少しでも展開し易くするために、次期情報教育システム、SCNL2005ではソフト・ハード面の初期的な環境整備をする予定であります。e-Learningに際して課題となる教材作成をより容易にする講義自動録画システムのPower Recを

導入することになっています。また、人的なサポートについても、SCNL2005の導入業者に依頼してあります。e-Learningを展開する環境整備はまだ十分ではありませんが、SCNL2005の導入を契機にe-Learningが少しでも前進すればと思っております。